

IT 担当職員の仕事

尼崎市立地域研究史料館 西村 豪

はじめに

いうまでもなくアーカイブズの業務とは史料を整理・保存・公開することであるが、これを進めていくうえでコンピューターとデータベースは不可欠な存在となっている。しかし、アーカイブズでIT（情報技術）の専門職員を置いている機関は少ない。尼崎市立地域研究史料館もしかりで、本来IT担当ではなかった私が実質的にその業務を担当している。本稿では私が現職に就いた平成12年以降実践してきたことを紹介し、アーカイブズのIT担当が担う業務について考えたい。

小規模館における実態

尼崎のような小規模館では、一人の職員が複数の史料を担当するのが普通だが、私もIT全般のほか図書、音響・映像資料を担当している。経費節減のため、ハードやソフトの設置・設定については業者任せにせず、自分でできることは自分でするというを徹底している。しかしIT担当職員がいない場合、それらは導入時に業者に任せてあとはそのまま、となることが多いのではないだろうか。導入後のメンテナンスについても問題なく稼働しているうちは見過ごされがちだが、古くなればハードもソフトも更新が必要になる。データはハードウェアの故障が原因で消失する危険があり、ソフト面ではコンピューター

ウイルスへの対策も必要というように、ITというのは便利である反面、非常にやっかいなものである。

システム管理者に求められる業務

以下、私の経験に即したシステム管理業務の具体例をあげる。

・ハードウェア管理

安全快適なPC環境を構築し運用する。“安全”のために、セキュリティの導入やバックアップ体制を構築し、“快適”のためにサーバーやユーザーのPCがよりよい状態で利用できるよう設定しカスタマイズする。

例：尼崎の地名や人名、史料名が一発で変換できる日本語入力辞書をすべてのPCに導入する。

・ソフトウェア管理

購入するソフトウェアを選定し、PCにインストールする。

・ユーザーのスキルアップ

PC操作のヒント(tips)を提供し、データ作成の生産性を高める。

例：ショートカットキー(コピーは[ctrl+c]など)を知ってもらう。

・使い方を定める

サーバーのデータ保存場所やファイルの命名規則などを定め、管理上よりよい方向にユーザーを誘導する。ソフトウェアの使い方

を説明し、機能を十二分に活用してもらおう。

例：個人データの保存場所としてサーバーに“みんなの文書”フォルダを作成。

例：バックアップ用にフロッピーを使わない。

例：Access データベースの構築アドバイス。

・基準をつくる

データ作成の基準をつくり、館全体のデータ品質を確保する。

例：スキャン画像の解像度や保存するファイル形式を定める。

例：半角カタカナの使用制限。

・掘り起こす

過去の情報資産（手書き目録・手書きカードなど）が眠っていないか？アナログだと眠っているものでもデジタルにすれば使えるデータになる可能性がある。

ここにあげた例はほんの一部であるが、システム管理者に求められる業務とは、ユーザーと職場全体の要望・課題をくみ取って、解決策を考え、実行することである。これらの業務はあらゆるオフィスで有効なものであって、対象はアーカイブズに限らない。

すなわち、発信力を強化するにしても業務を効率化するにしても、基盤となる PC 環境が安定的に運用できているからこそ可能なのであって、安全快適な PC 環境を提供することがシステム管理の基本である。

平成12年の PC 環境と情報発信

平成12年当時の館の PC 環境は平成10年に初めて導入した Windows 機と、館内 LAN によってネットワーク化された数台の PC という状況であった。これに加えて“行政事務支援システム”という庁内イントラネット（インターネット接続可）の PC が配備され、これ以降、对本庁業務を“行政事務”で行ない、アーカイブズ業務を館内 LAN で行なう体制となった。その当時、館内 LAN はインターネットに接続しておらず、館でのインターネットの利用は“行政事務” PC を使ったメー

ル程度で、館としてインターネットを通じた情報発信はほとんどなされていなかった。

ウェブサイトの構築

このため館の公式ウェブサイトと尼崎の歴史紹介サイトの開設を計画し、ホームページ作成ソフトを利用して HTML ファイルで構築し、平成13年7月、尼崎市ウェブサイト内に館公式サイトと“尼崎の歴史”サイトを開設した。せっかく作っても、更新のないサイトは誰も訪問しなくなる。開設後しばらくの間は意識して過去の情報の追加につとめた。これにより刊行物の目次や市史編集事業の経過など、サイト開設以前の情報が充実し、ある程度まとまった量の情報量を提供できるようになった。

データベースの整備

平成12年以降、手書きの記録やテキストファイルをデータベース化し、事務の効率化をすすめた。Microsoft Access により調査や相談事例を記録する業務別のデータベースを構築、データベースを使いやすくするため、VBA（プログラム言語）を使って、各種機能を組み込んでいった。

検索システムを開発し公開

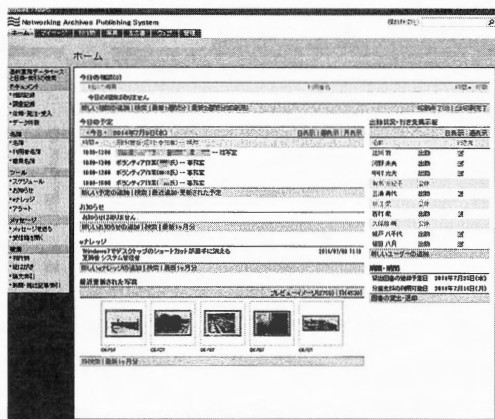
平成15年10月図書検索システムの開発に着手した。専門書とインターネット上の情報を参考に開発をすすめ、翌16年1月に完成し、館内での運用を開始した。

平成18年7月には Web 版尼崎地域史事典“apedia”が完成し、検索システムとともにインターネット上に公開した。翌19年4月には、レンタルサーバー事業者と契約して専用の独自サーバーを設け、検索システム、“apedia”、ウェブサイトをこのサーバーに移した。独自サーバーを設けたのは本庁サーバーの制約が理由であったが、これによってサーバー運用の自由度が高まり、その後の館の情報発信に計り知れないメリットをもたらした。

館内業務システムの構築

平成19年7月から、館内業務システム“NAPS”の開発をスタートした。これまで調査や相談といった業務別データベースは引き続き Access を利用していたが、それを“NAPS”の一機能として統合していった。“NAPS”には、単に既存のデータベースを統合するだけでなく、ユーザー間で情報を共有するツールや、必要な情報をすばやく確実に得られる横断検索など、レファレンスに役立つ機能を積極的に取り入れた。

情報発信の面では、検索システムに地図史料が加わったことで、ほぼ全ての所蔵刊行物が検索できるようになり、新たな試みとして尼崎藩家臣団データベース“分限”や絵はがきデータベース“あまがさきPCD”といった特定史料のデータベースをインターネット上に公開した。



現在の NAPS の画面

ウェブサイトのリニューアル

平成24年11月、約11年ぶりにサイトをリニューアルした。内容は大部分が初代サイトのものを引き継いでいるが、利用者の視点に立って、一からページ構成を見直した。メニューは目的別で構成され、最小限のクリック数で知りたい情報にたどりつけるようになっている。またプリンターフレンドリーな（印刷時にくずれない）デザインを採用した。ページはサーバー側のプログラムで生成する方式とし、メンテナンス性の向上が実現できた。定

期的な更新作業は“NAPS”から操作するようになったため、これまで特定の職員に依存していた更新作業が誰でもできるようになった。

“NAPS”による効果

近年、①インターネット公開を見込んだデータを“NAPS”で作成、②データ完成までの間に公開プログラムを開発、③インターネット上に公開というサイクルが確立しつつある。現在、昭和12年に刊行された『尼崎今昔物語』や尼崎関係新聞・雑誌記事索引のデータ入力が進んでおり、これらはいずれインターネット上に公開する予定である。

この間、インターネット上のデータベースが増えたことから、それらのデータ更新についてもシステム化が必要となってきた。このため“NAPS”に機能を追加し、週1回、担当者4人の持ち回りでインターネット上データベースを更新する体制を平成26年12月よりスタートさせた。

システム開発と運用の注意点

新たなシステムに既存のデータを移行する場合は、担当者との連携が不可欠である。具体的には、担当者の要望を聞き、データの入れ物であるデータベースを構築し、そこに入るデータに規制を設けて定型化し、検索しやすい形にまとめていくという作業になる。この過程で担当者と開発者の間で目標が共有されなければスムーズなデータ移行はできない。

その点、開発者である私自身レファレンスや調査のために“NAPS”をはじめとする史料館のシステムを日々利用するユーザーでもあるので、開発した時点では気付かなくても、使うことで必要とされるものが見えてくる。そうして自分が気付いたことや、他のユーザーからの要望を受けてシステムは随時改修を重ねている。システムは構築したら終わり、ではなく運用しながら変えていかなければならない“生き物”である。史料館では開発と運用の現場が一体であるからこそ、システムの柔軟な運用が実現できているのである。

システムを開発し、管理するにあたっては、それが旧弊なものにならないよう、新たな技術を導入することも大切である。しかし、システムはそれを利用するユーザーがあって初めて生きてくるのであって、開発する際はユーザーの視点に立って考え、ユーザーを無視して単に目新しい技術の実験場になっていないか、常に検証しておく必要があるだろう。

おわりに

現在、史料館では公式サイトのほか日常的な情報発信を SNS やブログ、レファレンス

協同データベースを使って行なっている。これらの更新作業は、日常業務の流れに組み込まないと忘れ去られて放置状態になりやすい。そうならないためには、職場でルールを決めて確実に実行していく必要がある。

サイトやデータベースの更新作業は“NAPS”でシステム化したことによって、他の職員でもできるようになった。このことが示すように、IT 担当職員の仕事とは、システムとユーザーの距離を技術で縮め、システムをユーザーにとって親切でわかりやすい存在にしていくこと、これに尽きると考えている。